

保育カンファレンスが保育者の「同僚性」に 与える効果の縦断的追跡研究

黒澤 祐介

1. 研究開始当初の背景

これまでの保育者の研修に関する研究においては、保育者の専門性向上のためには「省察」が必要なことや（津守：1989、鯨岡：2007など）、同僚性基礎とした「語り合い」が必要なことなどが述べられている（大豆田：2009）。

しかしながら、保育者が専門性を獲得していく過程において、悩みや学習ニーズの変容に一定のモデルや法則性がありえないとも考えられない。加えて、保育者がどのような悩みやニーズを持つかに関しては、単に経験年数だけでなく、保育者個々がおかれている園の方針や環境、体制、職員同士の関係も当然深くかかわってきていることが予想される。例えば、それぞれの園内外におけるサポート体制や園内での職員関係、担当学年や、園を構成する集団の諸要件などが考えられる。先行研究においては組織・人間関係の良好度が保育者のモチベーションやメンタルヘルスと強く関連していることも明らかにされている（安藤：2008）。

しかしながら、保育者の悩みや学習ニーズに関する研究は、ある特定の時点での悩みと関連する要因の相関分析に留まっている。保育者の悩みや学習ニーズがどのように変容していくのかについての追跡的な実証研究は少ない。また、保育の研修にも同僚性が注目されているが、学校教育分野では一定の理論的な蓄積があるものの、保育に対応した同僚性の検討はまだ端緒についたところである。

2. 研究の目的

本研究では、保育者の悩み、学習ニーズがどのように変容していくのか、また、どのような保育者を取り巻く環境要因が変容に影響を与えているのかを、

2年間のアンケートによる追跡調査によって、実証的に解明していく。加えて、アンケート調査の結果と、保育に対応した新しい同僚性の理論検討をふまえ、7名の新人保育者に対して同僚性を基礎とした多職種による協働的なカンファレンス型のモデル研修を実施し、その効果を保育カンファレンス実施保育所（介入群）と非実施保育所（対照群）を比較し評価する。

3. 研究の方法

本研究は2年間を通じて、京都府A市内の保育園26ヶ園に協力を依頼し行った。24、25年度とも9月と2月の計4回、409名の正規職員に対しアンケート調査を実施した。調査項目は、保育者の属性／満足度／悩み／相談、サポート／各種研修／職場環境、等についてである。カンファレンス型の研修については、7名の新人保育者を対象として京都府A市内の保育園7ヶ所にて実施した。各園にておおむね2ヶ月1度のカンファレンス型の研修を1年間継続して行った。研修の前後で保育者の悩み等や満足感、同僚性がどのように変化したかを質的および量的に調査する。加えて、アンケート調査での保育カンファレンス実施保育所と非実施保育所の比較を行うことにより、カンファレンス型研修の効果評価を行う。

4. 研究成果

(1) 同僚性に寄与する要因

アンケート調査において「同僚性」に関わる質問項目と相関関係があった主な項目は以下の通りであった。

「管理職との関係はよい」と相関関係があった項目
〈研修について〉

「自身のメンタルヘルスについての研修を受けたい」 $p < 0.05$ $r = -0.130$
〈職場について〉

「勤務時間・勤務体制に満足している」 $p < 0.05$ $r = 0.155$
〈職場内の会議について〉

「発言に対して、周りは共感の反応を示してくれることが多い」 $p < 0.01$
 $r = 0.991$

「職場の研修体制は十分に整っている」 $p < 0.01$ $r = 0.194$

「同僚保育者との関係はよい」と相関関係のあった項目

〈葛藤を感じる場面について〉

「保護者への対応はどうかについて保育所の方針と葛藤がある」
 $p < 0.01$ $r = -0.190$

「気になる子どもについてどう考えるかについて保育所の方針と葛藤がある」
 $p < 0.01$ $r = -0.226$

〈ストレスについて〉

「仕事のために心にゆとりがなくなったと感ずることがある」 $p < 0.05$ $r = -0.133$

〈研修について〉

「保育の基礎的理解の（年齢ごとの発達特性など）の研修を受けたい」 $p < 0.05$ $r = 0.160$

「自身のメンタルヘルスについての研修を受けたい」 $p < 0.01$ $r = -0.269$

〈職場について〉

「勤務時間・勤務体制に満足している」 $p < 0.05$ $r = 0.157$

〈満足感について〉

「今の仕事に心から喜びを感じることがある」 $p < 0.01$ $r = 0.255$

「この仕事は自分の性格にあっていると思う」 $P < 0.01$ $r = 0.195$

「保育の仕事に満足している」 $p < 0.01$ $r = 0.210$

〈職場内の会議について〉

「会議においては全員に発言権が確保されている」 $p < 0.01$ $r = 0.221$

「リーダーの意見のみが重視されることがある」 $p < 0.01$ $r = -0.228$

「職場の研修体制は十分に整っている」 $p < 0.01$ $r = 0.182$

これらの結果では、会議において管理職が指導的ではなく「発言に対して共感を示す」ほど保育者との関係も良いという分析結果が出た。一方、同僚保育士との関係の良さは、会議で「全員の発言権の確保」や「リーダーの意見のみが重視」されることと相関していた。

(2) 年齢による悩みの差異

保育士の悩みは、年齢によって異なることがアンケートより明らかになった。「発達障害など発達上の困難のある子どもの対応」に悩みがあると答えた保育士の割合は70%、「家庭環境に困難のある子どもの対応」に悩みがあると答えた保育士の割合は67%、「気持ちに寄り添うのが難しい子どもの対応」に悩みがあると答えた保育士の割合は65%と、半数以上の保育士が「養護」が必要だと考える子どもの保育に悩みを抱えていることが明らかになった。

また、保育者の年齢を30歳以下の若手と、31歳以上の中堅からベテランに分けて、各項目とクロス集計を行った。

まず、「発達障害など発達上の困難のある子どもの対応」の悩みがあると回答した30歳以下の保育士は79.2%にもなっており、特に「よくあてはまる」という回答は31歳以上では19.6%だが、30歳以下では34.2%と高い割合を示している。

次に、「家庭環境に困難のある子どもの対応」の悩みがあると回答した30歳以下の保育士は73.8%であり、特に「よくあてはまる」と回答した保育士は31歳以上では15.0%だが30歳以下の保育士では33.3%と、2倍以上の回答率となっている。

同様に、「気持ちに寄り添うのが難しい子どもの対応」の悩みがあると回答した30歳以下の保育士は72.9%となっており、中でも「よくあてはまる」と回答した保育士は31歳以上が13.1%であるのに対し、30歳以下では30.6%と高い回答率を示している。

「発達上の困難のある子ども」と「家庭環境に困難のある子ども」と「気持ちに寄り添うのが難しい子ども」は当然同列に語ることはできず、それぞれの困難さとその対応の内実や質はそれぞれ異なるものではあるが、この調査結果からは大多数の保育士がこれら養護を必要と考えられる子どもの保育に強い悩みを抱えており、特に若い保育士に顕著であることが明らかになっている。

(3) 比較研究

2年間の比較研究からは、保育カンファレンス実施保育所において非実施の保育所に比べ、保育者の仕事に対する満足度や、同僚性に関わる項目が有意に上昇していることがわかった。1回目ではカンファレンス実施保育所と非実施保育所の間に有意さはなかったが、カンファレンス実施後3回目のアンケート

より、有意差が見られてきた。(図1～図5)

保育カンファレンスに同僚性の醸成に寄与する効果があることを証明した。

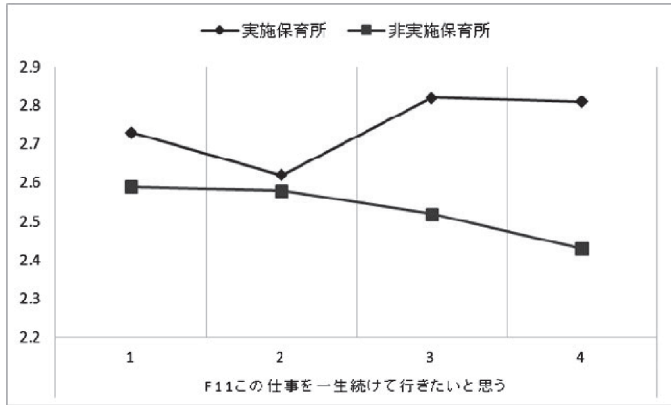


図-1

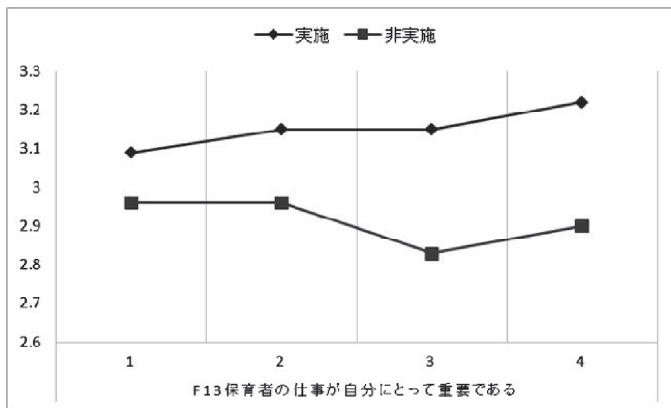


図-2

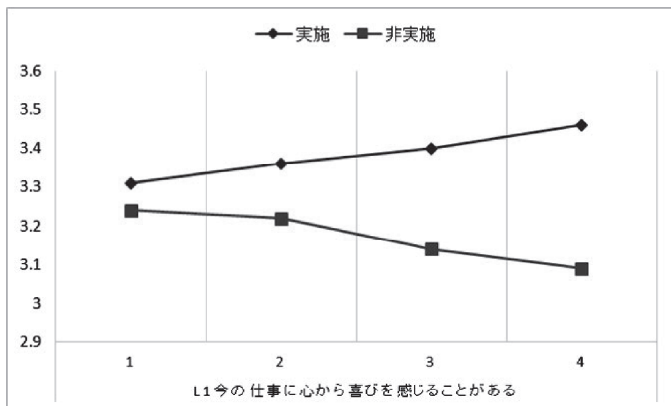


図-3

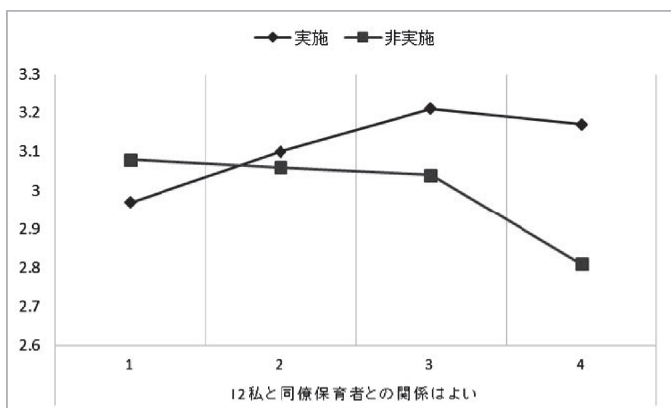


図-4

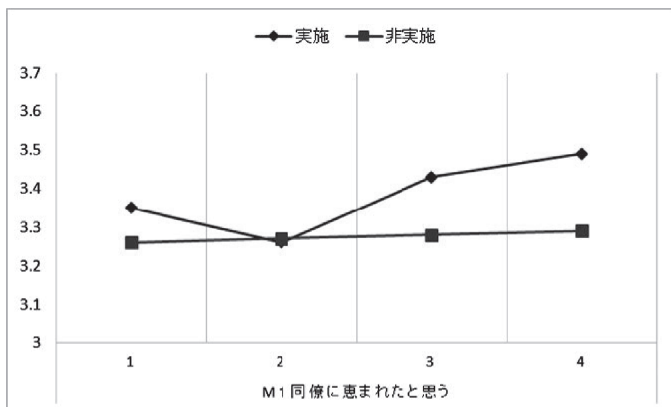


図-5

主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 黒澤祐介 「保育所における社会的養護機能の再検討」 大谷学報 大谷学会 第93巻第2号 p.24-p.36 2014年 査読有
- ② 黒澤祐介 「保育における拡大された同僚性の検討」 大谷学報 大谷学会 第92巻第1号 p.72-p.82 2012年 査読有

[学会発表] (計2件)

- ①企画者・司会者 黒澤祐介／話題提供者 田中美沙子・山本哲生・北川耕一・箕浦ふじ代・福岡孝子／指定討論者 服部敬子 「若手保育士を支える保育カンファレンス—京都市営保育所での実践と2年間の追跡型アンケート調査—」 第67回日本保育学会 自主シンポジウム 2014年5月
- ②黒澤祐介・服部敬子 「保育者の悩みの質と関連要因の研究(1)—同僚性に着目して—」 第66回日本保育学会 口頭発表 2013年5月

研究組織

(1) 研究代表者

黒澤 祐介 (Kurosawa Yusuke)

大谷大学・文学部・助教

研究者番号：40633631

